

# 濱田洪一物語

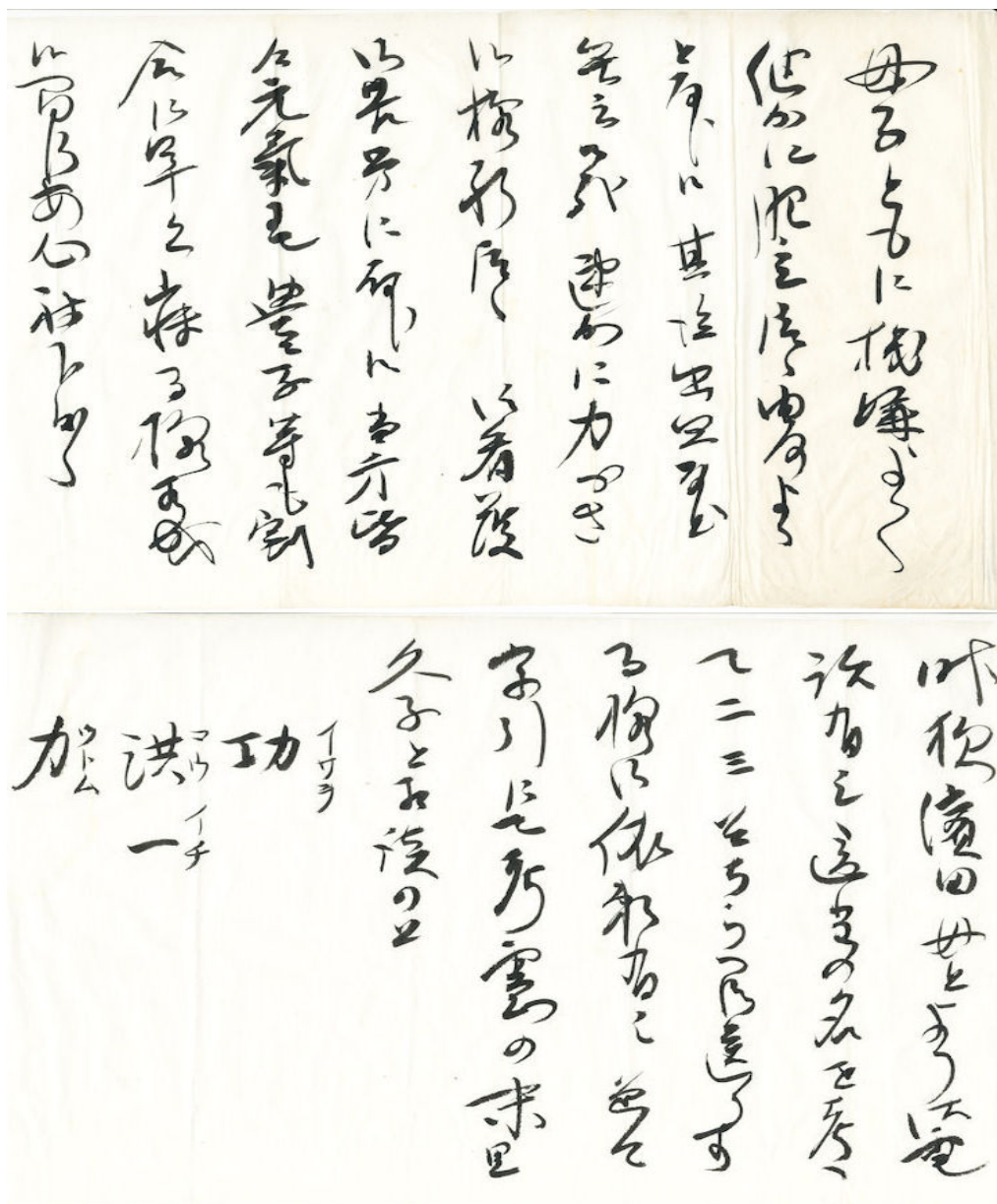
---

0歳～72歳

## 祖父の命名

### ◆ 名前候補の手紙

昭和 16 年 5 月 25 日、神戸の甲南病院で生まれた。



前年の昭和 15 年 2 月結婚した、父駿吉、母政子の初めての子、母方の祖父田宮猛雄、佳子の初孫だった。

父、母の実家は東京目黒の上大崎、結婚後は兵庫県の芦屋市に住んでいた。命名の手紙の豊子、久子は母の妹、宛先はお産の手伝いに芦屋に来ていた祖母佳子宛になっている。名前候補の真ん中の洪一が選ばれた。

## ● 母方の祖父田宮猛雄

○「ガン回廊の朝」柳田邦男著 講談社 昭和 54 年 6 月

初代総長田宮猛雄から第 6 代石川七郎までの国立がんセンターを中心にしたガンの臨床医や研究者の世界を描いた柳田邦男のノンフィクションだ。

第一部、昭和三十七年、国立がんセンターの発足から初代総長の田宮を病院長の久留勝が診察してガンの診断をする。吉川英治が肺ガン手術後亡くなった。X線二重造影法、胃カメラなどのガンの診断技術が開発された。

第二部、肺ガン診断の坪井式末梢病巣擦過法発明、昭和 38 年、癌研の田崎勇三、がんセンターの田宮猛夫がガンで相次いで亡くなる。

第三部、タバコと肺ガンの究明に取り組む石川の下で、池田茂人が気管支ファイバースコープを作った。昭和 39 年、第 2 代総長比企能達成の下へ池田勇人首相が入院し、翌年亡くなった。

第四部、昭和 49 年第 4 代総長塚本憲甫もガンでなくなった。この間にも、CTの導入や杉村隆らによる発ガン物質の究明により、がんセンターを中心とするガンの治療は進んだ。

この本は、がんセンターを通して、昭和の歴史を語るのもだ。

私は田宮猛雄の孫で、田宮が亡くなった当時、大学生で田宮の家から通学していた。

田宮も、「海軍主計大尉 小泉信吉」と同年生まれの、長男、春雄を、昭和 19 年 6 月、軍医長として乗っていた特別砲艦永興丸がマレー沖で撃沈され、失った。

田宮は、外出から戻ると、神棚の春雄の写真にお参りしていた。

#### ◆ 父方の祖父濱田長策（慶應義塾写真データベースより）

明治二十六年大学理財・法律科卒業生写真。写真前列右 2 人目番目から 門野学務主任、チゾン法科教頭、福澤社頭、小幡塾長、ドロップス理財科教頭、増田塾監。この写真の旧蔵者である濱田駿吉は、3 列目左から 3 番目、斜めを向いている濱田長策の次男。長策は、長男に福澤社



頭の名前を、次男に門野学務主任の夫人の名前「お駿」の駿をいただいて、それぞれ「諭

吉」および「駿吉」と命名した。濱田諭吉は、昭和初期サッカー部の初代主将で、「サッカー」の命名者。濱田駿吉は、ホッケー部のゴールキーパーで、1932 年ロスアンゼルスと 1936 年ベルリンの両オリンピックに参加し、ロスアンゼルス大会では銀メダルを獲得した。

◆ 満 1 歳



◆ 1942 年 2 歳 父が戦争中、綿花栽培のためフィリッピンに派遣された。母と私は東京の母の実家へ



叔父さんの尺八をいたずら

1945 年 4 才 東京空襲のため富山県へ疎開

1947 年 6 才 フィリピンから帰った父が大阪勤務のため、堺市  
へ。父と妹と堺の海で泳いでいて、私が溺れた。

### 小学校

1948 年 6 歳 父の転勤に伴い、東京へ。

森村学園入学、校訓は、「正直、親切、勤勉」。

兵隊用の犬の毛皮のランドセルで通学したので、「ハゲ チョロカバン」といわれる。

1952 年 11 才 図工の吉田先生にかわいがっていただく。



2012 年 9 月、森村の同級生、山崎紘之亮さんと連絡がつき、お互いの近況など、十数回のメール交換をした。

1953 年 12 才 西宮市立甲東小学校 6 年へ転校

修学旅行は伊勢志摩



2013 年 3 月、甲東小学校の同級生、浦辺太郎さんが、卒業以来 60 年ぶりの同窓会を秋にはやりたいと言ってきた。

## 中学

1954 年 13 才 甲陽学院中学入学、通学は白い風呂敷

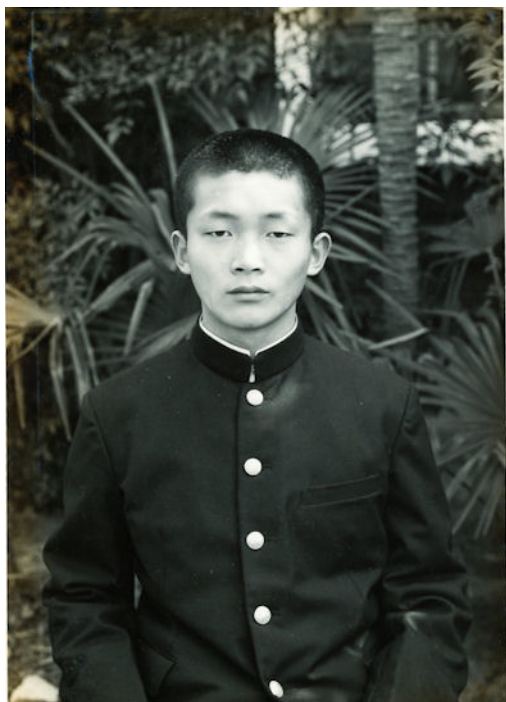


1955 年 14 才 学校の前の香櫨園浜で遠泳、3km



1956 年 15 才 中学 3 年でハンドボールを始め、サッカーに転向。  
懸垂は出来なかったが、マラソンは早いほう。

## 高校



1956 年 16 才 高校でもサッカーを続けた。

1957 年 高校 2 年の時、運動会マラソンで全校 3 位。

もともと走るのは苦手

小学校の頃から走るのは苦手で運動会の徒競走はいつもビリだった。

中学の頃、長距離は割と速く走れ、練習すればするほど結果がよくなることがわかり、面白くなった。

高校の体力測定 1500m は学

校の隣の甲子園球場2周だった。2年生の時、5分台前半で走れるようになり、運動会のマラソン選手に選ばれた。コースは4km離れた中学往復の8kmだった。結果は全校で3位、しかも1位から4位まで2年C組だった。1位は野球部投手で4番の北川、2位はバスケット部の吉田、3位はサッカー部の私、4位はバスケット部の柄谷、5位は陸上部長距離選手、3年生の勝山さんだった。

北川公一は慶應⇒近鉄バッファローズのプロ野球選手、2010年の同窓会総会では、卒業50年の我々を代表して「甲陽⇒慶應⇒近鉄バッファローズの先輩、別当薫さんを尊敬している。」という話をした。柄谷は東大を出て、柄谷行人というペンネームの哲学者として活躍している。

応援に来てくれた母が、「胸が厚くなり、頼もしくなった。」とほめてくれたがうれしかった。

マラソンは一生のスポーツとして今も続けている。

## 大学時代

### 1960年京都大学理学部、慶應工学部受験

西宮に住んでいた私は、駒沢の竹中の家から、慶応を受験した。正一郎叔父は言った、「洪一ちゃん、京大と慶応と両方受かったら慶應の方がいいぞ。」さいわい私は、京大は落ち、迷わず慶応に進んだ。

#### ● 叔父竹中正一郎

慶應義塾は1932年、1回だけ箱根駅伝で優勝した。

昭和7年1月のことである。この時の8区の走者が竹中正一郎である。

同じ年の8月、ロスアンゼルスで開催された第10回オリンピック、5千メートルに出場した竹中正一郎は1周遅れたが、新聞は「抜かれる際、わざわざ外側へ移動して、インコースを譲った」と書いた。帰国後、竹中は「道徳的な敢闘精神の持ち主」といたるところで称えられた。

竹中は困惑し、憤慨した。「とんでもない。夢心地で、たまたま外側によろめいたんだと思う。もし、内側によろけて衝突していたら、妨害で悪者にされる可能性すらあった。不利な外側コースを走るはずがない。コースを譲ることは、既に負けたということ。そんな選手は走る資格がない。それが美談とは…」

「ずっと心の傷だった」―竹中の述懐。この話は、20 年以上も前に竹中が亡くなったとき、朝日新聞のコラムでも紹介された。

次は、三田評論 2006 年 6 月号、「慶應義塾、一枚の写真『ホッケーの銀メダル』」に、私の父濱田駿吉が書いた文章の最後、「帰りの船中では塾生の陸上選手竹中正一郎君と塾生ボート選手等と酒をこたま飲み、酔っ払って、怒られてハワイ上陸を許されなかった思い出もあります。」

次は、私が覚えている、父と正一郎叔父から聞いた話。

1936 年ベルリンオリンピックにも参加した父は、帰りの船がマルセイユに着いたとき、「妹の重子と竹中正一郎が結婚することになった。仲人はロサンゼルスの時も、今回のベルリンでも選手団長を務めた平沼亮三さん(日吉の陸上競技場に胸像がある)だ。」という電報を受けとった。

## ● 父の銀メダル

父、濱田駿吉は、1932年ロスアンゼルスオリンピック、ホッケーに日本のゴールキーパーとして出場、銀メダルを取った。

三田評論2006年6月号

慶應義塾、一枚の写真⑩

-----ロサンゼルス・オリンピックの思い出-----

はまだしゅんきち

濱田駿吉(慶應義塾体育会ホッケー部 OB・昭8 経)

一九三二(昭和七) 年のことですから、今から七十四年前と大昔のことです。ロス五輪 (第十回大会) ホッケーのメンバーは十五名のうち私も含めて二人が塾生、二人がOB 佐藤武雄団長と浅川増幸主将、日本選手団の団長も塾の平沼亮三さんでした。

ホッケーに出場したのは日本、米国、インドの三カ国だけでした。ヨーロッパの強豪国は第一次世界大戦後の疲弊から、アメリカ西海岸まで選手を送ることを断念。英国の不参加は植民地インドの強さを知り、負けることを恐れたためとも言われていました。



ロサンゼルス・オリンピック(1932年)での対インド戦。左端のゴールキーパーが濱田氏。右下は銀メダル。

当時の船旅では、ロサンゼルスまで十七日間かかりました。ロスでは大変な歓迎を受け、フォードの新車に乗せられて CityHall(市庁舎) に直行。そこで三段跳びの織田幹雄選手が、市長さんらしき人から大きなキーを渡され、「これでロスを自由に見物してくれ」と言われました。我々はバスの乗車券をもらい、空いた時間に街をまわりました。

選手村は今のビバリーヒルズにあり、我々はそこにテントを張って寝泊りしました。

夏のロスは雨が全く降らないのに、不思議なことに始終水を撒いている。水源はどこかと思えば、ロッキー山脈からふんだんに運ばれてくるとのことでした。

開会式は満員の聴衆で感激も一入でした。肝心の試合ですが、初戦は強敵のインドで、会場は開会式をやったオリンピックスタジアムです。試合経過は前半一方的に攻められて 0-4、しかし後半に日本はついにインドゴールを割り、貴重な 1 点をもぎ取り話題に。結果は 1-11 で敗戦。しかし続く米国戦では、我々が一方的に攻めて 9-2 で勝利し、銀メダルを掴んだのです。これは日本の団体競技での初めてのメダルです。

帰りの船中では塾生の陸上選手竹中正一郎君と塾生ボート選手らと酒をしこたま飲み、酔っ払って、怒られてハワイ上陸を許されなかった思い出もありま

す。横浜に帰港したときは大活躍した水泳選手とともに、熱烈な歓迎を受けました。銀メダルですが、戦災や阪神大震災といった苦難を越え、この二月塾ホッケー部創部一〇〇年記念式典席上で寄贈し、新しくできた日吉の「下田学生寮」内の部室の一角に飾られることになりました。

## 慶應義塾大学

慶應義塾大学工学部管理工学科入学。1 年夏は安保闘争デモ盛ん。

1 年秋は早慶 6 連戦、毎日神宮に通い応援。

以来 50 年、毎シーズン神宮球場の慶應の応援席に通っている。

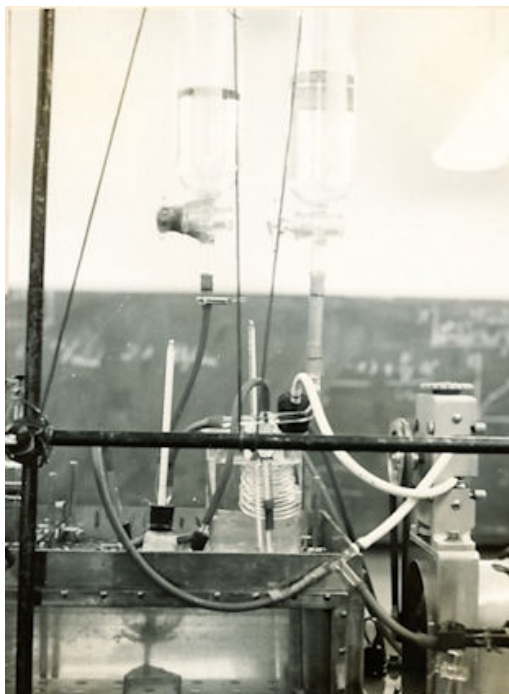
### ◆ 2 年から小金井校舎へ



### 工学部サッカー部3年工学部サッカー部主将

- ◆ 1962 年は、ドイツ留学から帰国された堀内先生の歓迎試合で年が明け、春の合宿は宇都宮だった。理工系リーグは、主に大岡山の東工大グラウンドで行われ、東工大、千葉工大、早稲田理工に負け、成績はもう一つだった。納会が新宿のニュートーキョーで行われ、我々が「若き血」など歌うと、隣で会合を開いていた早稲田のクラブが負けじと「紺碧の空」などを怒

鳴り、会場全体が騒然となった。その席で新キャプテンに選ばれたばかりの私が提案して、我々が「都の西北」を歌ったところ、向こうも「若き血」を歌ってお互いに静かになり、新米キャプテンは胸を撫でおろした。



## 管理工学科林研究室

1963 年、北村和彦さんと組んで、「化学半島操作の動特性」(酢酸エチルエステル生成反応におけるインディシャル応答)という学士論文をまとめた。

蛇管を冷却水の中に入れて、温度をステップ変化させた。

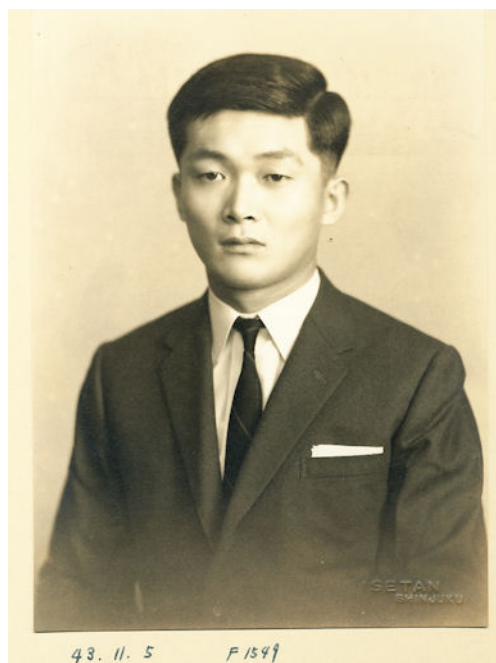
アナログコンピュータによる理論モデルと比較した。

### ◆ 修士課程

1965 年、「製油所のリニア・プログラミング・モデル」という、修士論文をまとめた。

製油所の装置容量、原料輸入量などを244コの変数、131コの制約式で表し、大型電子計算機用リニアプログラミングで解いた。

## 三菱化学



### ◆ 高圧ポリエチレンの需要予測

1966 年、三菱化成工業(当時)に入社、本社計数室配属。  
最初の仕事は高圧ポリエチレンの需要予測だった。

石油からとれるナフサを分解して、エチレン、プロピレンなどをつくる石油化学が日本で始まったのは1958年頃だから、1966年当時は、日本の石油化学9年目ぐらいだった。エチレンを重合させてつくるポリエチレンには、軟らかいフィルムなどになる高圧ポリエチレンと、バケツなどの成型品になる中低圧ポリエチレンがある。高圧ポリエチレンでは、後発の三菱化成が、先発各社の業界団体である、石化協や当時の通産省に、「高圧ポリエチレンの需要はこんなに伸びます」という説明資料を作って、新規参入の認可を得るため、電子計算機を使って需要予測をした。IBM7090は当時日本中に数台あり、その内の1台が大手町の三菱原子力にあった。三菱系の会社が共同で使ってた。BIMDという統計解析プログラムのデータカードの束をもって、新入社員の私は、計算機にかけるため丸の内の事務所から大手町まで通った。

フィルムは包装用で、今ではレジ袋、ゴミ袋に使われている分野だ。

ラミネートは、牛乳パックの内側などだ。当時、牛乳はビンで配達だったから、本当にこんな分野が伸びるのかなと思った。

電線被覆は、文字通りの分野だが、当時は同じ樹脂の塩ビやゴムが使われていた。

射出成型は、バケツやおもちゃどの雑貨でやはり塩ビやセルロイドが使われていた。

各分野ごとに需要はこうに伸びるという予測値を出し、三菱化学の高圧ポリエチレンプラント建設が認められた。

## ◆ エチレンプログラム実習のため、2 週間アメリカへ



1970 年、29 才の時、初めての海外出張で米国へ 2 週間行った。

三菱化学が次期、石油化学工場設計のため、エチレンプラント設計プログラムを購入した。その使い方の実習とユーザー訪問のため、ニューヨーク、セントルイス、テキサスへ行った。

同期入社でエチレンプラント担当の中野常雄君とコンピュータ部門の私と二人で行った。

羽田で当時婚約中の家内の見送りを受け、ニューヨークへ。1 ドル 360 円の

時代で、儉約しながら計算センターを夜間貸し切りで使い実習した。

後半ユーザー訪問で、テキサス州の米国とメキシコの国境の町、コーパスクリスティに行った。午前中、IBM S360 というコンピュータを使ったデモンストレーションが終わると、先方の年配技術者が、午後は奥さんと一緒に自家用のヨットでクルージングをしようと誘ってくれた。



必死にプログラム  
の使用方法をマスタ  
しようと意気込  
む若い我々二人  
に、生活を楽しむの  
もとても大事なこ  
とだよと教えてく  
れた年配

技術者に感謝の念がいっぱいだ。

## 結婚

### ◆ 初めて会ったのは雪の土曜日

母の同級生、福川さんのお宅で、やはり母の同級生の娘、樋口薫に会った。1970年2月28日、雪の土曜日だった。

会う前の紹介状で彼女が聖心の卒業生であること、同じ5月25日生まれであること、父上が慶應出身のお医者さんであることがわかっていて。

会って話してみて、この人なら一緒にやっていけると思い、結婚して欲しい旨の手紙を書いた。宛先の樋口薫を間違えて桶口薫と書いてしまったが、すぐ否(樋)でなく OK(桶)の返事を貰った。以来43年、すべて OK と私は思っている。

11月3日、麻布教会で結婚式、赤坂プリンスホテルで披露宴、仲人は在学当時の慶應義塾長、高村象平・薫御夫妻にお願いした。

新婚旅行は、南九州、新居は小金井社宅アパートの2階だった。

## 三十代

### ◆ 長女直子誕生

1972年、長女直子誕生。

予定日を過ぎててもなかなか生まれず、恵比寿の妻の実家で、連合赤軍派が軽井沢の山荘にこもったテレビを見ていたが、3月10日、愛育病院で生まれた。

### ◆ 1973 年 コンピュータ専用ビルへの移転担当

### ◆ 1974 年 水島工場転勤、次女百合子誕生

1974 年 2 月、岡山県倉敷市の水島工場に転勤した。6 月、お産の時期を迎え、妻と、長女は当時名古屋の病院に勤めていた妻の父の家に行った。6 月 28 日、聖霊病院で次女百合子が生まれた。

### ◆ 1980 年 工場内オンラインシステム完成

### ◆ 横浜総合研究所転勤

## 四十代

### ◆ 1985 年 横浜、鹿島を繋ぐ「安全性研究トータルシステム」完成

### ◆ 1986 年 スーパーコンピューターVP50 導入 特殊情報処理技術者試験合格

◆ 1990 年 東京から横浜に転居。画像処理システム販売

## 五十代

- ◆ 1991 年 菱化システム社出向  
ソフトウェアの品質保証、機器営業担当
  
- ◆ 1995 年 パソコン教育担当。
  
  
- ◆ 1999 年 工業所有権協力センターへ転籍  
オンラインシステム、ワープロの特許先願技術調査
  
  
- ◆ 2000 年 フルマラソン初めて完走  
以降 2007 年まで、毎年フルマラソン、海外マラソン参加。

## 六十代～七十代

◆ 2004 年 ヨコハマシステムでレーザー加工機の輸入販売

◆ 2007 年～ クラブフォーラムワンで交流会の企画

F1 経済研究会の幹事。

◆ 2008 年～ FIT(大学サッカー部 OB 会)主務

機関誌「FIT だより」編集発行。

◆ 2013 年 「マイ・エンディングノート」

「自分史 濱田洪一」作成

## おわりに

2012年、父の友人、菅原惇さんから、戦時中フィリピンで亡くなった菅原さんの父上の思い出「亡父の人生の軌跡『往時茫々』——書き残しておきたい元マニラ在留邦人の活躍と逃避行——」をいただいた。

小学校の同級生山崎紘之亮さんから、山崎さんのおじいさんの自叙伝「昭和 39 年 3 月 15 日『走馬燈』金婚式に際し 山崎権次郎 述」をいただいた。

従兄弟の忽那滋一郎さんから、滋一郎さんの従兄弟の忽那静夫さんの日記を編集した、『戦争時代の光芒』編集 矢野 正博 ある学徒出陣慶大生の日記——陸軍中尉忽那静夫」をいただいた。

2013年、山崎紘之亮さんから、友人の川崎鉄雄さんが書かれた「我がころのふるさと『神宮の杜』」をいただいた。その中の「父の思い出」について川崎さんは、小泉信三の「海軍主計大尉 小泉信吉」に感激して、「父の思い出」をまとめたと書かれている。

「海軍主計大尉 小泉信吉」は私も感激し人生で感銘を受けた本として、2006 年、次の感想を書いている。

○「海軍主計大尉小泉信吉」小泉信三著 文藝春秋 昭和 41 年 8 月

慶應義塾理工学部サッカー部OB会 (FIT: Fujiwara Institute of Technology) の年 1 回の会合があった。長く部長を務められた、堀内敏夫先生の奥様が昨年なくなったので、そのお写真をお借りして、会場に飾り皆でご冥福を祈った。

我々が現役でプレーしていた 40 年以上前、小金井のグラウンドにご一家で応援に、よく来てくださった。

一年先輩の飛騨康則さんが「海軍主計大尉小泉信吉」の信吉の手紙、「英子さんは慎ちゃんの入学の報に御機嫌となり、飯を十一杯食べた由、これは心配です。」のページを開いて、写真の前にお供えした。

この英子さんは亡くなった奥様の小学生時代のことであり、おちょこのように小さなお茶碗だったのに、とご本人は言ってらっしゃったとのことだ。

昭和 17 年戦死した長男信吉の思い出を父の当時の慶應義塾長、小泉信三が、信吉からの手紙を中心にまとめたものだ。

昭和 21 年、300 部限定私家版として発行され、昭和 41 年信三の死後、

「文藝春秋」から公刊された。

公刊されたとき、社会人一年目だった私は夢中で読んで感激した。しかし、「飯を十一杯」のような記述があるのにはこれまで気がつかなかった。

改めて読んでみて、信三も信吉も、戦争について非難めいたことはどこにも書かいてないが、深い悲しみが伝わってくる。しかも、戦前から戦中の、生活歴史がたんたんと書かれている。信吉の死後も、信三は、出て征く学生に頼まれ、日々国旗に揮毫している。

この5月は、小泉信三が亡くなって40年、また読んだが、また感激した。

こんなことから、私もこの自分史をまとめてみた。

2013年6月17日      濱田洪一